

あまりに厳しい免除規定、 冷たい医療政策は変えなければならない

小豆沢病院には、この間20人ほどの患者さんが震災から避難して受診しています。

最初は、水戸城南病院の透析患者さんたちでした。続いて、福島や宮城から避難している患者さんたちが受診。病院近くの親戚や家族のところに一時的に身を寄せている方たちが中心で、主に持病の処方薬がなくなったり、頭痛や不眠などで処方を希望する患者さんです。

しかし、中には深刻な事例もあります。避難所で体調を崩し入院している高齢の患者さんですが、福島に帰れる見込みがなく、家族が今後の生活再建のために動くにも患者さんを抱えながらでは困難ということでの入院継続です。また、親戚の家から当院の透析に通うことになった患者さんは、看護師が福島の病院に今後のことで相談の電話をしましたが、病院自体が移動していて、その院長先生自身も今後の展開が見えないということでした。家族は原発関連の仕事をしていて、福島に帰らないわけにはいかないということで、今は、お一人で東京にいます。最後は胸がいたむ事例ですが、東京の避難先の老人保健施設で急変し心肺停止状態で救急搬送され、亡くなってしまった患者さんです。息子さんがいるとのことでしたが、施設でも病院でも連絡が取れず、結局、警察に引き取ってもらうことになりました。

医事課では、受付で被災者専用の受付用紙を作成し窓口負担金免除のお知らせなどもしています。しかし、免除規定があまりにも厳しく、しかも最終的判断は保険者がするなど、患者さんにお尋ねしたり説明するのに躊躇してしまうような内容です。日ごろの人間を大切にしない冷たい医療政策、行政。膨大な被災者を前にして、それでも変えないのか、変えられないのか。改めて憤りを感じているところですし、変えなければならないと思うところです(小豆沢病院 医事課長 横山 淳一)。

～被災者の窓口負担、介護サービス利用料等での事例を県連までお寄せください。～

入れ歯洗浄剤とコップがあれば・・・。

避難所生活で移動手段がなかったり気持ちが向かなかったりで、歯科受診がなかなか出来ないようです。「入れ歯を洗います」とアナウンスをしても恥ずかしいからか、なかなか手を挙げてくれる避難者が少ない。汚れもあって本来ならもっと需要があるはずなのに。洗面所数が少なく、洗面所で入れ歯を洗いつらい状況。ポリデントなどの入れ歯洗浄剤とコップがあれば洗いたい人はたくさんいるはず。現地対策本部に掛け合っ

て松島の歯科部隊から入れ歯洗浄剤を融通してもらう段取りをつけました。しかしまだまだ足りない状況で支援物資の一つに入れて欲しい物品です(「東都協議会支援対策本部NEWS No.34」より)。



4月17日(日)～18日(月)で吉田万三副会長(写真右)と千坂事務局長(写真中央)が現地へ激励に出かけています。詳細は後日ニュースにてお知らせします。写真左は、元大田病院職員の花木かよ子さん(長町病院附属クリニック事務長)です。

東京民医連 東日本大震災
義援金達状況

(4月12日現在)

42,780,612 円